

六花

RIKIWA

∞

俳句雑誌りつか  
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん  
今

人の顔

山田六甲

梅雨きのこ踏まれて人の顔になる

七種の滝

走り根の蛇じやでもかまはぬ滝の道

香焚いて滝の呪縛の中にをり

滝壺へ近づくと母へ泣く子かな

滴りに舌の根湿しなほしけり

滝風の青々と降り注ぎけり

足許の明るきうちに滝去いなむ

難産の蟬なる桑の真昼かな

蓮やせて風呼ぶすべもなかりけり

蜘蛛の糸三味線とんぼ触れて過ぐ

目が合うて蓮の向うの人暮るる

逆鱗に触れたる梅雨の出水かな

雨すだれ鬩竜灘の鮎の宿

水風呂にちぢむも楽し梅雨は明け

涼しさや渡り廊下へ笹の音

室津かなびたりと止まる昼の蝉

玫瑰や歩けば餅のやうな砂

肩たたき百回分のかき氷

あめつちほしそら山川夜の秋

原爆忌さざなみのやうに人歩き

急に室津

急に鳥取

別いろは

改訂

海光の沖より来たる夏燕  
葉桜や幹も小枝もひとつ影  
雪柳こぼれはじめは風にのり  
桜鯛糶の終りの水を撒く  
湿りたる崖に手をあて苺摘む  
桜湯の香の残りたる白磁かな  
目の抜けし青葉の中の仁王かな  
水中の杭に日あたり燕子花  
尺蠖のまだ尺とらぬうすみどり  
花は葉に夫つまに付き添ふ検査室

# 雪卿集

筍

永田万年青

筍の皮の内側すがすがし  
筍の太きに母のにが笑ひ  
筍の思ひのほかにやはらかき  
筍を焼ける匂ひの甘かりき  
花万朶雨の試練を乗越えて

燕来る

佐津のぼる

落椿たちまち囲む水輪かな  
うぐひすの次の声待ち待たさるる  
ふるさとの校歌の山や花の雲  
音曲の花街が好き燕来る  
卒業す弦の疲れし楽器提げ

# 雪卿集

海 髪

志 方 章 子

長閑かな水面に揺るる桜影  
たんぽぽと蝶が一つになりてをり  
莢の外より蚕豆の数かぞふ  
海髪やもしれず磯辺に見しものは  
赤んぼに微笑みてみる春愁

つ つ じ

出 口

誠

ベランダの手すりにかかる鯉幟  
花落ちてめしべの残るつつじかな  
若楓間に煙突の見えてをり  
夏蝶の草の中洲に止まりけり  
若竹の曲げてもすぐに真すぐかな

# 田一枚空に上げたる蛙かな

田尻勝子

たいちまいそらにあげたるかわずかな たじりかつこ

息吹きて鈴虫の生れ見てをりぬ

田一枚空に上げたる蛙かな

梅雨寒や父の故郷球磨免田

一歩ごと名呼び歩きぬ遠い夏

米搗きが待ち草臥れた時に飛ぶ

田一枚という上五は芭蕉の「遊行柳」に出てる句の表現に同じ。五音なのになぜか違和感の残る言葉。ここではその田んぼが蛙の喧噪によって空に上げられてしまったよ、と勝子は本気で思ったのだ。彼女は冗談めかしたように詠むが本気である。それだけに可笑し味も爆発する。この句に思い当たったのは「船頭多くして船山に上る」だ。指図する人間が多いために統一がとれず、見当違いの方向に物事が進んでしまったとえ。一枚の田圃は山どころか空に上がってしまった。西行ゆかりの「遊行柳」は観世信光作の謡曲にもなっている。

鳥つるむなんぢやもんぢやの花咲いて 廣畑育子

とりつるむなんじゃもんじゃのはなさいて ひろはたいくこ

花びらの張り付くボール転び来る

鳥つるむなんぢやもんぢやの花咲いて

芍薬の玉固くして日の暮るる

石楠花は恋の最<sup>さなか</sup>中の色なりぬ

夏萩の風に透けぬる茂りかな

花の名前からしてすでにユーモアを含んでいる。よく分からない樹木の花を「何といふ物じゃ?」と言い合っているうちに、いつの間にか「なんじゃもんじゃの木」ということになってしまった、というのが定説。この作品、人の目がナンジャもんじやの方に向いているどさくさにまぎれて鳥がつるんでいるのが可笑しい。「なんじゃもんじゃ」と名付けられる植物の樹種は、ヒトツバタゴのほか、ニレ、イヌザクラ、ボダイジュなど様々という。育子は動植物に詳しくて句の邪魔になっていたがこの句は、その知識を抑えて佳句を呼び込めた。



# 雪樹集

はくれん

藤生不二男

はくれんのしばらくありて散りにけり  
ひとひらの鯉の寄りくる落花かな  
二三片残しで牡丹散りにけり  
雨粒のふゆる岸辺や糸柳  
鶯のこゑの飛び交ふ墓域かな

えぐみ

赤松有馬守破天龍正義

筍のめぐみとえぐみ土佐育ち  
筍はおまへが掘れと婆ば様さま言ひ  
十葉の有り難がられ疎まれて  
蛇穴を出て仕事の手の遅し  
亀鳴けりその日暮らしの道極め

# 蛩雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十七年六月号鑑賞

どんな読書がいいのか自らでは分かりにくい。偶然手にしてはまり込むものもあれば、勧められて読んでよかったという場合もあるだろう。読書は俳句に役立てようとして読んでも役には立たない。俳句は大吟醸の精米のようにこれ以上研いだら米ではなくかるといふ限界まで削ってみるといい。それを実現するには「句整はずんば舌頭に千転せよ」と芭蕉が示している。まず句意（核心）だけを書いて、あとは読者に伝わるか、リズムが調っているかを声上げて自作を責めればいいのである。なお情のある句について、先般から竹の子句会で口うるさく言っているが、私自身もある場面の一つの言葉（会話）を反芻している。それは晩年不遇の孔子が弟子たちに「もし君たちが世間に認められるようになつたら何を行うか」と問うた。弟子達はめいめいの政治上の抱負を語るが、曾皙だけは、「沂ニ浴シ、舞雩ニ風シ詠ジテ歸ラン」と言った。沂水という川に浴して、雨乞いの祭を舞う土壇で涼風を楽しんで帰りたい。という意味である。孔子も同感して私もそうしたい。と言ったと書いてある（論語・先進第十一）。これが情であろう。このような風雅に楽しむ心が情けある句を呼び込む。この場面ですぐ思い立つのは芭蕉看病の場面。他の弟子達とちがって丈草が詠んだ「うづくまる薬缶の下の寒さかな」。六花ではすでに「神戸弁現代語訳去来抄」に掲載している。覚えている



人は情けある句を読めるようになってはいるはず。書を余所に求めず六花を熟読すれば俳句が深まるはずである。私は弟子の句を熟読することによって学ぶ。

海光の沖より来たる夏燕

笹村 政子

視点はいい。海の光が沖から射して来たのか、光る海から夏つばめが飛んできたのか表現的には曖昧なところも残るが、後者の光る海の沖から飛んでくる黒い点が突然燕の形となったというところかと思う。この表現でもよいが政子もそろそろ「来たる」という表現を省く工夫をするようになればいいと願うが、これはなかなか無理な注文だろうか。主宰は可能だと考える。期待して居る。目の鱗一枚落としたら解決する。それが目の前に来ているのだから。

六花集

八月号



平居 濤子

飛鳥路やたんぼの絮とばしつづ  
陵の開かずの門や竹の秋  
草餅も並べ飛鳥の無人駅  
石舞台史学科新入生囲む  
クローバー寺の礎石をおほひけり

延川五十昭

筍の伸び比べぬる雨の朝  
筍の見上げるほどに伸びにけり  
天蓋の藤咲きこぼる古利かな  
大草鞋架けて若葉の仁王堂  
佇めば弥生遺跡に五月風

谷口 一献

満開の奥千本の花に酌む  
咲き満ちて折目正しき山櫻  
励ましてくるる人あり櫻時  
花に酒医者の言葉も有耶無耶に  
夜桜を愛でつお七に誘はるる